

街道をゆく 十二 司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和五十四年九月三十日 第一刷発行

街道をゆく 十一

八二〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 朝日新聞社 藤田雄三
印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 東京・名古屋・大阪・北九州 朝日新聞社

© 司馬遼太郎 一九七九年

街道をゆく

十一

本書には「週刊朝日」昭和五十二年四月八日号・連載第二百九十七回から同年八月十九日号・第三百十六回までを収録。

目次

肥前の諸街道

震天雷など

今津の松原

虹の松原

呼子の浦

7

21

33

47

唐津の黄塵

61

平戸の蘭館

75

船首像

87

尾根と窪地の屋敷町

101

蘭人の平戸往来

115

印山寺屋敷

129

按針と英国商館

141

宮の前の喧嘩

155

開花楼の豪傑たち

167

横瀬の浦

181

パードレ・トーレス

福田 浦

長崎甚左衛門

教会領長崎

カラヴェラ船

慈恵院

193

207

221

235

249

263

題字 棟方志功
え 須田剋太
装幀 原 弘
地図 大川一夫

震天雷など

肥前の諸街道 一



肥前（長崎県・佐賀県）は海岸線が皺しわばんで、大小の入江が多い。紀元前、稲作農耕という新文明が北九州一円にひろがったとき、漁撈民たちは頑固に浦々に棲すみつづけることを固執した。

「あの泥田を這はいまわって苗を植えている連中と、おれたち浦人とはちがうんだ」

という意識は、浦人の側にあったであろう。絶対的な多数を占める農民たちは、少数にしかすぎない漁民をばかにしたにちがいない。農民を基盤にした律令制は、国家的な規模でその意識を助長した。

が、中世になると、すこしずつ事情がちがってくる。海の時代がはじまるのである。

中世ともなると、とくに肥前の西北角の浦々はことごとく剽悍ひょうかんな海賊の巢窟になったといっている。さらにそのあと、日本の中世末期に、世界史における大航海時代が勃興してくると、これらの浦々は紅毛南蛮の文化の受入れ口になった。浦々の回復というべきかもしれない。

私の昔からの癖だが、地図の中で肥前の島々や浦々をたどっていると、にわかに貿易風の吹きわたるにおいを感じてしまう。さらにはそれらの地図が、単なる日本地図というよりも、世界史の色彩に重ね染めされているようにも感じられるのである。

たとえば平戸の海峡は十六世紀のヨーロッパの航海者のあいだでは日本名以外の名称でよばれていたし、また北松浦郡の湾の湾内にうかぶ鷹島たかしまは十三世紀の元寇のときの元軍の基地であ

ったために、漢人たちから五竜山と名付けられたり、白骨山と名づけられたりした。なぜ五竜であり、なぜ白骨なのかと考えるだけでも、玄界灘や東シナ海にうかぶ中国式外洋船の帆のはためきがきこえて来そうに思える。

須田画伯とは、早くから肥前の浦々にゆくことを約束していた。

「サクラの頃ですか」

画伯はのびやかに言った。画伯は肥前にも長崎にも行ったことがない。それだけにその想像の肥前は少年のイメージのようにみずみずしく、どういうわけか、この日本列島の西北角をこの人が想うとき、浦々に満開のサクラが華やいているようなイメージになるようであった。

ただ時間がうまく作れなかった。このため二度に分けてゆくことにした。たまたま一月の末に私は福岡市に行かねばならぬ用事ができた。その用が済めば、とりあえず大村市と長崎市にだけ行ってみましょうかと画伯に相談すると、画伯は私の勝手をゆるしてくれた。

「いくら何でも、一月末では、まだサクラは咲いていますまい」

と、画伯はその点だけが不満そうだった。

その一月末の木曜日の午後、須田画伯と国鉄諫早駅前で落ちあうことにした。画伯は大村駅前の旅館に前夜から泊まっていて、当日、約束の時刻に、はるか九州の地で出会うというぐあ

いになった。画伯はひとりで見知らぬ町の駅前旅館にとまったということがよほど心細かったらしく、諫早駅の駅舎の軒下で互いを発見したとき、平素駈けることのないこの人が、黒鞆を背負ったままチベット牛のようにゆるゆると駈け寄ってきてくれたときは、他愛もない邂逅ながらも、涙腺がゆるむ思いがした。

「駅前旅館は、どうでした」

ときくと、

「おいしかったです。魚もおいしかったですし、豚の角煮もおいしかったです」

と、たべもののことばかり報告してくれた。そのあと、大村を見、長崎で泊まった。二泊だけで切りあげた。画伯にとってはじめての長崎だったのに、スケッチもろくにできないような余裕のなさだった。

そのあと、ひどい寒さが来た。それが去るのを待つしかなかった。地球の冷却化とか、氷河時代が来るかなどというおそるべき情報のはらんしたりした。きわめて良い意味での妖言の時代というべき世間にわれわれは住んでいるのかもしれない。

上方では、奈良の二月堂の「お水取り」が済むと暖くなる、と言う。私の記憶するかぎり、この言い伝えが裏切られたためしがないように思うが、ことしはそうも行くまいとほとんどあ

きらめていた。ところが結願^{けつがん}の三月十二、三日ごろからうそのように春めいてしまい、私の家の日蔭の白梅までが満開になった。その数日後に、大阪を出た。むろんサクラにはまだまだ遠いという日である。

まず、福岡をめざした。

機上で地図を見ているうちに、博多湾を西から抱えている寸足らずの半島(糸島半島)に「蒙古塚」という小さな活字が入っているのを知った。

「とりあえず、ここへ行きましょう」

と、隣席の編集部のHさんに地図を見せた。Hさんは近眼鏡をひたいにずりあげて、地図に顔を寄せた。その場所は糸島半島の東岸にあり、海岸は砂浜で、砂浜の南端に毘沙門山という八三メートルの山が小さく盛りあがっている。

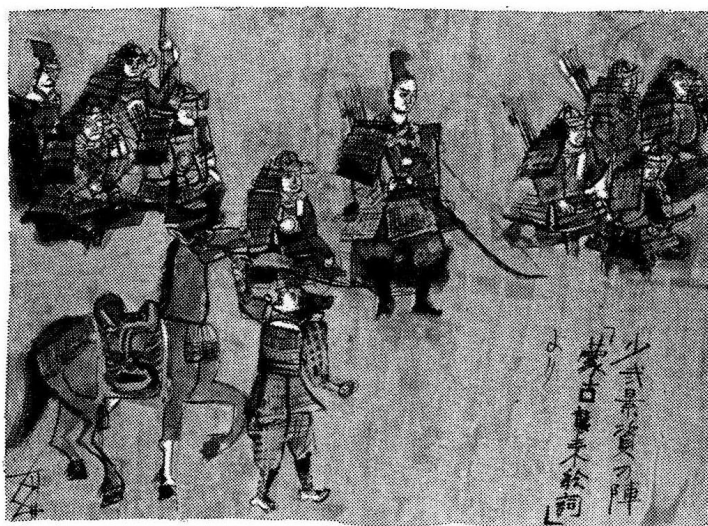
「蒙古塚……」

Hさんは、くびをかしげた。

「聞いたことがありますか」

「ありません」

この人は、かつて小倉で勤務したことがある。九州にはくわしいはずだが、知らないとい



う。私も十五、六年前、博多湾沿岸の元寇遺跡はくまなく歩いたつもりでいるが、そういう存在どころか、名称さえ知らない。

江戸期には、福岡から唐津までの国道202号を「唐津街道」とよんでいた。われわれはこの旅の第一日とその街道を経て唐津までゆくことですごすつもりでいるが、地図によれば「蒙古塚」というのは街道沿いの今宿^{いましゆく}から右へ入って十キロも行けば所在するらしく、大した寄り道にはならない。

「サクラが咲いてますか」

と、それまで窓ガラスに顔をつけて機外を見ていた須田画伯が、あかるい表情で質問してきた。「蒙古塚」に桜が植わっているかどうかまではわからないが、もし植わっていればこの陽気でつぼみが相当ふくらんでいるだろうと思え

た。

空港のビルの柵さきを出ると、原岡加寿栄さんが迎えにきてくれていた。彼女は九州の旅のときはたいいてい同行してくれる。小倉に戦後ずっと在勤しているから彼女の年齢の勘定は不可能とはいえない。しかし木綿のページュのジャンパーにジーパンという軽装が似合いすぎて、須田画伯などは彼女をまだ小娘だと思っているふしがある。彼女は当然ながら九州に通曉している。私は会うとすぐ地図を見せて「蒙古塚」がたしかに所在するかどうかきいてみたが、彼女もくびをひねって、聞いたことがありません、といった。

空港ビルの前でタクシーを拾った。乗る前に運転手に地図を示してきいてみたが、かれも、知らんですな、といった。場所は福岡市の郊外にすぎないのである。ちょっと不安になってきた。

「ともかく、今宿から右折すればよかとですね」

運転手は大ざっぱにうなずき、走りはじめた。走りはじめるとすぐ、私は地図を見ながら、別な質問をした。

「箱崎はどの方角ですか」

九州大学の所在地である。